

《狼の巣》

黎明の銀獅子

目次

序章	夜明けの訪問者	5
一章	金と銀の獅子	9
二章	払暁の資格	47
三章	裁定者	98
四章		151
終章		210

序章

ウルたちの元に、〈裁定者〉が現れた。
すなわち星は、開かれたのだ。

巨大な黒い竜が告げて回った唐突な報せは瞬く間に惑星《ウル・ターシャ狼の巣》中を駆け巡り、それはもちろんヤシャトたちの大陸とて、例外ではなかった。

「なら、ずっと昔に宇宙へ出てったっていう狼ウルフどもだって、もういつ帰ってきてもおかしくないってことか？」

小柄な影の問いに、相対するそれよりも数回り大きな筋肉質の人影が首を振った。

「いんや。宙のウルはとづくにこの星の近くにはいねえんだから、戻ってくるには何十年もかかるって考えるのが自然だろうさ。それ以前に、連絡を取るのにだってえらい時間がかかるんだ。少なくともそいつは、今日明日する心配じゃねえってこった」

「……なら、問題は今ここにいる地のウルか。連中が鎖星をやめて技術を取り戻したら、また戦争になるんじゃないのか？」

「さて、どうか。わしはそうは思わんが。連中は一頃の間違いを随分と反省したからこそ、星を鎖してすべてを捨てたんだからな」

「そんなの……とづくに忘れてたつて、おかしくない。ヤシャトを大勢殺して、縄張りも獲物も何もかも奪つて苦しめた、残酷な連中なんだから」

「ふむ。わしらのほうは何一つ忘れちゃいねえのに、か？」

「それは……オレたちが、侵略されたほうだからだろう」

小柄な人影が見てきたように言うと、大柄な影は鼻を鳴らし、小さく笑つたようだった。「そうかもな。それに昔の地のウルがいくら反省して何百年も星を鎖したからつて、わしらと同じで、ウルも一枚岩じゃねえ。元々星を鎖すのに反対してた連中が今も生き延びてたのなら、一気に元氣を取り戻して侵略戦争再びと洒落込んでもおかしくはねえだろうさ。だが——」

「だが？」

「どうやってかは知らねえが、少なくとも連中は、ウルじゃねえへ裁定者」と、あの禁足地の竜……元々はヤシャトだった番人に、星開くべしと認めさせたんだ。おまえがウルをどう思つてるかは知つてるが、もしも奴等が今もおまえの思つてる通りの悪辣非道な連中ばつかりで、すぐにでも戦争を起こそうと息巻いてるんだつたら、きつと裁定は違つた

ものになつてた。そうは思わねえか、ん？」

「……」

その結論が気に入らなかつたのか、むすりと黙り込んだ小柄な影に、大柄な影は低く渋みのある声で、ゆつくりと言ひ聞かせた。

「いいか、トルヤーク。この通り、同じヤシヤトのわしとおまえですら、ウルに対する考え方が違う。西側のヤシヤトと東側のヤシヤトがいがみ合つてると同じようにな。ウルだつてそうだ。昔の話を散々聞かされて育つたおまえが連中を敵視するのは仕方ねえだろうが——」

「また説教か！ オレはそんなことを聞きに来たんじゃない！」

小さな人影は煩そうに叫ぶと、牙を剥いて唸りながら踵を返し、薄暗い部屋から走り出て行つてしまつた。

「……ふむ。まあ、そうだろうが。しかしあの様子じゃ、若い連中は随分と息巻いとるな……使節団が妙な気を起こさなきやいんだが」

残された大きな影はとぼけた声でそう呟くと、頭をぼりぼりと掻いて、ひとつのんびりと欠伸をした。

「〈裁定者〉か。紅いたてがみに毛のない肌を持つた、爪も牙もない珍妙で小柄な生き

物だそうだが……想像もつかんな」

聞いた特徴を思い出すように短く節くれ立った指を折りながら呟いていた影は、最後に自分の思い描いた像に可笑しくなったのか、喉の奥を雷鳴のように鳴らして笑った。

「叶うなら、一度お目にかかつてみたいもんだ。遠い星から来た〈裁定者〉、ウル共の為にえらい貧乏くじを引かされた、一人ぼっちの宇宙人とやらに——」

一章 夜明けの訪問者

張り詰めた心地良い空気の中で、ティグは一人、息を潜めていた。

今日は久々の楽しい狩りだ。

とは言っても、知識の伝承を至上の役目とする〈鎖す者〉の一族たるティグは元々、それほど狩りが得意ではなく、経験も豊富ではない。

だというのに楽しいのは、今日の彼には最良の仲間がついているからだ。それも、久々に一緒に出掛けることを許された相手たちである。

狩りの方法はいつもと同じだ。夜明けの薄暗がりの中で獲物の足跡を探すところから始め、手に負えそうな相手を選んで、そつと後をつける。

ウルの鋭い嗅覚から逃れられる獣はほとんどいない。まして今回は、ティグの属するケムの群れでも最も優れた嗅覚の持ち主が参加している。

相手のすぐ傍まで忍び寄るのに、さして時間は必要なかった。

獲物は大鹿^{エトウラ}——貝殻のように身を守る形に頭から後ろへ広がった、巨大な角を持つ草食

動物。振り回される角は細い木々ならば叩き折るほどの硬さを持ち、当然ながら生身で受ければ骨の一、二本は容易く折られ、下手をすれば死にかねない。

故に子供の頃には恐ろしい相手だったが、今のティグには、少しも怖くはない。

最良の仲間が、すぐ傍にいるからだ。

ティグが隠れているのは川岸に生えた背の高い草の陰で、エトウラは川辺に近寄って、水を飲む前に辺りを警戒しているところのようだった。

風は川上から吹いている——そしてエトウラから川下にしばし下った灌木の陰には、巨大な黒い影が潜んでいる。

ティグもその陰も、ぴたりと地面に伏せて草や茂みに視界を塞がれており、直接大鹿の隙を窺うことは出来ない。かといって相手が油断しきつていない状態で奇襲するには、川辺は少し開けすぎている。

角の大きさから見て、エトウラは少なくとも六、七歳。百戦錬磨とは行かないが、安全な場所と危険な場所をよく弁えている個体だった。

だが、そんな用心深い個体でも、予想出来ないことがある。

やっと水面に首を垂れて水を飲み始めた大鹿の真正面、葉をいっぱい茂らせた細い木の上で、ちらりと光が瞬いた。

ぴい、と優しい小鳥の声がすると同時に、ティグと灌木の影は同時に飛び出した。刹那、物音に驚いて振り向いたエトウラの頭、硬い角に守られない目と角の間へと、木の上から一条の光が奔った。

鋭い風切り音と共に飛来した、一本の矢。

その鋭い鏃は過たずエトウラの頭に突き刺さり、致命傷に等しい深傷を負わせた。

だが矢の初速が足りず、貫通までは行かない。痛みと混乱に後ろ脚を蹴り上げて甲高い笛のような鳴き声を上げたエトウラが暴走気味に走り出そうとするところに、横合いから飛び掛かった巨大な影が襲いかかった。

獰猛な唸り声と共に大鹿を上回る巨体で相手を抑えつけたのは、漆黒の巨大な狼、ケムの群れの先祖返り、イピチャ。

彼の横を走り抜けたティグは、暴れ狂うエトウラの背中側へ回り込んで、その首筋に深く喰らいついた。

びくりと大鹿の身体が震え、溢れ出て喉へ流れ込む熱い鮮血に、我知らずティグの喉の奥からはイピチャと似たような唸り声が漏れていた。

その姿勢を崩さないまま、ティグは背中から引き抜いた石の刃で、ひゅうひゅうと弱々しく鳴っていた獲物の首筋を断ち切り、とどめを刺した。

遠い遠い昔、ウルがまだ道具を持っていなかった頃から誇りと共に受け継がれ、少しずつ変化しながらも未だ原初の形を色濃く残している、狩りの最後の儀式。

牙と舌が感じる、命の残り香たる微かな痺攣と、その後にはゆっくりとやってくる、死の静けさ。幼い頃、これに慣れるまで、ティグは随分と時間がかかった。

川辺の草が赤く染まり、牙を引き抜いても血が飛ばない程度の時間が経ってから、ティグはそっと顎を開いて身を起こし、血に塗れた鼻先を舐めながら、仕留めた獲物を見下ろした。

血溜まりの中、目を見開いて息絶えた、大きく美しいエトウラ。

「立派な毛皮だね」

ふと、澄んだ声が、静かに言った。

既に前足を退けていたイピチャが川のほうを振り向き、大きな尾をゆるやかに振る。

ぱしゃぱしゃと水に素足を浸しながらやってきたのは、ティグやイピチャとは似ても似つかない、奇妙な外見の生き物だった。

最初に目につくのは、鮮やかな赤毛。それもティグたちウルのように全身を覆っているわけではなく、頭部からだけ生え、肩口までを覆う程度に長く伸びた、不思議な毛並みだった。

ウルと同じように頭に目と鼻と口があつて、二本の足で歩いてはいたが、鼻先は尖つてはいないし、平面的な口の中には草食動物めいたきれいに並んだ歯があるだけで、鋭い牙はない。

背は小柄なティグよりもさらに二回り近く小さく、やはり毛皮を持たない腕や足はか細く脆弱に見えた——が、そのウルより細く長く器用な指が、先刻の矢をつがえ、川向こうの不安定な細木の上から、動いた瞬間のエトウラの急所を過たず射たのだ。

「一撃で仕留められなかった。あまり苦しまなかつたといけれど」

「元々レイナはこいつを驚かせて、おれたちのほうに向かわせるだけのはずだつた。上出来だよ」

少し悔しそうに呟いたその生き物——レイナは、ティグの言葉に小さく首を振つた。黄金の瞳を翳らせて、エトウラの亡骸の目をそつと閉ざす。

「あたしにも、もう少し力があればなあ……」

「でも、スフカみたいにごつくなつたら、あんな細い木の上になんて隠れられなかつた
だろ？」

「それはそうなんだけど……それ、スフカに言つたらすごい怒ると思うよ」

「あ、言わないで」

身をすくめて尻尾を下げたティグの反応に小さく笑ってから、レイナはふと真顔になって、呆れたようにティグの顔を指差した。

「とりあえず、顔洗ったら？ 割と派手に染まってるよ」

「え？ ほんとに？」

ティグが慌てて顔を押さえ、肉球についた大鹿の血にこりやひどいと嘆息しながら川に向かおうとしたとき、ふと。

微かな足音を聞きつけた気がして、ティグはよく子供っぽいとからかわれる大きな耳を後ろに向けた。

レイナは気付かなかったようだったが、隣にいたイピチャ、普通のウルよりもよほど鋭い五感を持つこの先祖返りのウルは、当然ティグと同じ物音を聞いたのだろう、小さく唸って振り向いていた。

その相棒の反応に気付いたレイナは、腰の後ろに手を回し、そこに刺した短剣の柄を油断なく握った。彷徨う彼女の視線はイピチャに誘導され、やがて川とは反対の、先刻ティグが潜んでいた辺りの下生えの一つへと向かう。

「……」

誰も、何も言わなかった。潜んでいるものによつては、喋って音が掻き消された一瞬が

命取りになるからだ。

ウルはこの星で——いや、この大陸では間違いなく食物連鎖の頂点にいる種族だったが、それはこの生物の息遣いに溢れた森の中で、あらゆる危険と無縁でいられるということではない。

毒を持った虫や閃光の如き一撃必殺の護身術を持った小動物には枚挙に暇が無い——なんとなれば、かつて彼等を絶滅させかけたウルたち自身が彼等の住処を守り、元の生息数を取り戻そうと増やしてきたのだから。

先刻の大鹿を相手にしたときとは別種の緊張。小川の控えめなせせらぎが耳につき、木々が葉を揺らす音は無論、通る風のささやきまでもが煩わしい。

際限なく高まっていくその張り詰めた空気の中、それを果敢に破らんとするかのようによつと件の下生えが揺れ——。

ひよこり、と。

純白の小さな小さな影が、何気ない様子で、顔を覗かせた。

「……え？」

毒気を抜かれたような声で呟いたのは、レイナ。だが、ティグも、そしてたぶんイピチヤも、全く同じ心地だった。

闖入者は、先のティグのように草むらに伏せていたわけではない。ただあるがまま、立っているだけで、草の丈が背丈よりも高いのだ。

それほどに小さく、細い鼻先とそこに集まった白く長いヒゲ、丸く大きな耳、丸まりがちな背に地面に引きずる長い尾を持った、それは――。

「……小スルヴァット？　なんで、こんなところに……？」

呟いたティグをちらと見遣って何やら得意気にヒゲを捻ると、小さな生き物は短い腕を優雅に動かして、レイナへ向けて一礼した。

「やや、先程の狩りはお見事。特にそちらの小さい方、見事な弓の腕前ですな！」

「……喋った！」

文字通り飛び上がって驚いたレイナの着地の衝撃で、小スルヴァットのあまりにも小さい体躯が一瞬ふわりと浮く。慣れつこなのか、高い声で喋った彼――と思われる生物は、動揺もせずにチイチイと高い声を上げて笑ったようだった。

「おや、〈裁定者〉殿は、某^{それがし}たちのことをご存知ない？　天下に名だたる小さき賢者、遙か東の果ての大陸カムチ・ペシダを支配する地の底の偉大なる帝国の主とは、某ら小スルヴァットのことですぞ」

胸を張って謳うようにそう言つてのけた小スルヴァットは、よくよく見れば茶色の擦り

切れたローブをまとい、自分の身体と同じくらいの大きさがありそうな荷物を背負っていた。それでも彼自身と合わせてレイナの手の平に載る程度ではあったが、どうやら人形遊び用の小道具めいた道具があれこれぶら下げられたそれは、彼の旅道具であるらしい。

「小スルヴァット……って……えーと、なんか、聞いたことはある気がするんだけど。なんで小なの？」

「スルヴァットが別にいるからだよ。もつとずっと大きくて、彼等小スルヴァットみたいに高度な知性がない大鼠。姿は似てるし、遠い先祖は同じらしい。この辺にはいないけど、カムチ・ペンダじゃ多いんだ」

〈鎖す者〉の面目躍如とばかりに得意顔で知識を披露したティグに、レイナはへえ、と素直に頷いた。

だが、その足元で飛び上がってキーツと怒りの声を上げたのが、件の白い小スルヴァットである。

「某たちをかの図体ばかりで愚鈍な連中と似ていると評するなど失敬千万極まりない！ それにおぬし、いつまでも獲物の血をその口にべったりつけたまま客人に接するとは、いかな野蛮なウルとて少々礼儀がなつとらんのではないか!？」

踏み潰してしまいそうなほど小さな生き物にえらい剣幕で怒られて、ティグは耳を伏せ

て後退った。

「ち、ちよつと洗つてくる……」

「うん、そうしたほうがいいね」

苦笑したレイナに見送られて今度こそとぼとぼと川縁に向かいながら、ティグはふと、先にレイナに呼び掛けた小鼠の言葉を思い返していた。

〈裁定者〉。

すると、彼とここで出会ったのは、偶然ではないというわけだ。

「……レイナも随分、有名人になったもんだなあ」

その理由には、ティグ自身も無関係というわけではない、のだが。

寂しいような誇らしいような心地を抱えながら、ともかくも早く血を洗って引き返し、あの小さな怒りつぽい生物が何をしに来たのか聞き出したほうが良さそうだと、ティグは足を速めた。

◆ ◆

「おつと失敬、礼節を説きながらまだ名乗っておりませんでしたな。某は小スルヴァッ

トのパッポス。遙か東方よりはるばる旅をして参った流れの伝承師です」

ティグが離れて行くや、真つ白な小鼠はレイナに向き直り、被っていた枯れ草色の小さな帽子を持ち上げて挨拶した。頑なにレイナの後ろに控えているイピチャのほうを見ない辺り、そもそもウルがあまり好きではないのかもしれない、と推測しながら、レイナはパッポスの前にしゃがみ込んだ。

「はじめまして。あたしは——」

「ああ、勿論存じ上げておりますぞ、〈裁定者〉のレイナ殿でしょう！」

遮るように口を挟まれて、レイナは瞬いた。この小さく忙しい生き物の国では、人の話を遮ることは無礼には当たらないものと見える。

「とはいえ守りの竜リファロン殿よりお話に伺っただけですが、このパッポス、一目お姿を見てすぐに分かりましたぞ！ 燃え立つ曙光の如き赤毛、我等の手足のごとく毛皮を持たぬ繊細な肌、知性を宿した黄金の双眸！ まさしく某の思い描いていた通りだ！」

「え、えーと……」

びよんびよんと地面の上で飛び跳ねながら何やら興奮した様子でまくしたてた小スルヴアットは、続いてちよいちよいと前に出てくると、レイナを見上げて小さな桃色の両手を組み合わせた。

「某は直接（裁定者）殿に顛末を伺いたくて参ったのです。一体全体あなたはどこから来られ、どうしてかつてウル共が鎖したこの星を再び開くおつもりになったのか？」

きらきらと光を反射する黒い目で見上げられて、レイナは内心大分弱った。さつきからこの訪問者は彼女を裁定者裁定者と妙に持ち上げるが、その称号は彼女にとつて、降つて湧いたように授けられた、偶然の産物だったからである。

つい一月前に宙の上から墜ちてきて、また宙の彼方へ旅立つて行つたとある人物がもたらした、一連の騒動によつて。

「それは……その。半分、成り行きみたいなものなんだけど」

レイナが頬を掻きながら正直に答えると、パッポスはチィチィと身体を揺すり、長い前歯を覗かせて笑つた。

「まさか、成り行きばかりでそのような決断は下せませう！ とはいえレイナ殿は星の外のお方、迂闊な相手には話せぬ事もおありでしょうな。某はその辺り弁えておりますが、近々来るはずのヤシャトたちの使節団はどうか、少々怪しい。嘘でも尤もらしいお話を用意されたほうがよろしいかと思ひますぞ」

したり顔でヒゲを撫でつつ架空の深い事情を察した様子の小鼠にどう真実を説明したものかとレイナが迷っていると、横合いから低い声が飛んだ。

「使節、団」

短い言葉は、あまり喋るのが得意ではないイピチャの声。

これまでずっと黙っていた巨躯の狼が喋ったことにパッポスは心底仰天したようで、キイと小さく悲鳴を上げて背後の草むらの中へと飛び退った。

「あ、ちよつと。大丈夫だから、出て来てよ」

レイナの呼びかけから数拍を置いてから、そろり、草を掻き分けて、白い身体が転び出てきた。まだ少し腰が引けているが、とにかくもイピチャを見遣って口を開く。

「し、失敬。何分本能は誤魔化せないもので……そちらの古きウル、言葉も話されるんですな」

「うん、あんまり得意じゃないけどね。でも、そつか……使節団？ ヤシャツって確か、隣の大陸の……」

「その昔はウルの次に大きな勢力を持った種族だよ。おれたちとおんなじに二本の足で歩いて、背は一回り低いけど、がっしりしてて横幅があるんだってさ、獅子シヤウは」

顔の周りの毛を水で濡らしたティグが身震いしながら戻ってきて、そう口を挟んだ。

血はすっかり落ちていますが、濡れた分とどこどころ毛のボリュームが減ってちよつと貧相である。ウルたちは総じてそこそこ毛足が長く、普段の見た目よりも実は大分細い。

「そのヤシヤトの使節団が来るの？　ここに？」

「さあ、おれは聞いてないけど……」

「嘘などついておりませんぞ！　何しろ某は、そのヤシヤトの船の隅を拝借して密航してきたのですからな！」

ふんぷんとヒゲをぴんと伸ばして怒ってから、不意にパツポスはあらぬ方向を振り向いた。小動物特有の鋭い動きであちこちを見渡しながら、ひくひくと鼻先を動かし、耳を立てている。

「密航……？」

「シツ。某らの大陸とここウルスターンの間には避けようもなくヤシヤトの大陸があるわけですが、小スルヴァットは歴史上ヤシヤトが苦手でしてな……どうも、その苦手な連中の気配がする。彼等も随分と急ぎ足で来たようですな」

純白の小鼠はそう言うのと、名残惜しそうにレイナを見上げ、幾度かさつき向いていた方向と彼女を見比べてから、仕方なさそうに一、二歩下がった。

「一番乗りでお話を伺いたかったが、こればかりは仕方がない。ひとまず失礼つかまつります。どうか次にお目にかかる時には、多少なりと某へ、〈裁定者〉の物語をお聞かせ下さいませよう！」

「あ、うん、気をつけて……」

軽く帽子を上げてからぴよこんと一礼するや、前足を地について、小鼠は素早く茂みの中へと消え失せた。

かさかさという音がしていたのはほんの一瞬で、そのささやかな足音は、レイナには勿論、ティグやイピチャにもすぐ聞き取れなくなったらしかった。

肩をすくめたティグと顔を見合わせて、レイナは苦笑する。

「……なんだか、忙しい子だったね」

「忙しいっていうか、落ち着きがないって言うか……。小スルヴァットに会ったのはおれも初めてだけど、みんなあんな風だったら、ちよつとカムチ・ペシダには行きたくないな——って、それどころじゃない、ヤシャトだ！」

ふるふるるとまた首を振って水を跳ね飛ばしながら叫んだティグに、レイナは手を翳して水飛沫を避けながら、ついでに反対に座っている黒毛の狼を振り向いた。

「すぐ傍にいるのかな？ イピチャ、分かる？」

「……」

イピチャは鼻先を上に向けてしばし風の匂いを嗅いでから、小首を傾げた。

「なにかは、いる」

「何か？ イピチャの鼻でも分からないのか？」

「……妙、だ」

多くを語らない相棒に眉をひそめて、レイナは彼の毛並みをそっと撫でた。いつも通りのふわふわとした暖かい手触りが、急に立ちこめてきた嫌な予感を和らげてくれる。

「早く戻ったほうがいいね。エトウラはそのまま運ぼう。イピチャ、頼める？」

ウルが数人がかりで運ぶ大鹿をそのまま背に乗せられるほど大きな狼は、黙って地に伏せた。

どこか遠くで鳴き交わす鳥の声がした。先刻レイナが合図に使った指笛が真似た、この辺りにはよくいる鳥の声——されどその声は妙に切迫して、迫り来る何か不吉な出来事を報せているようにも聞こえた。

かの星開きの事件から、しばし。

どうにか取り戻したはずの平穏が再び破られようとしている予感に、レイナは軽く身震いしながら、既に冷え始めている獲物の身体へ手を伸ばし、矢を引き抜いた。

かくして、その予感通り。

帰路の途上で不意に鋭く鳴いた風に、イピチャは背中の獲物を放り出して身を躍らせ、

レイナの身体をかつさらった。

一瞬前彼女の身体があつた場所にぬると光る金属の鎌を持った矢が突き刺さり、次いで木々の間から妙な装束に身を包んだ何者かが数人躍り出るや、白刃を閃かせてレイナたちを斬りかかつてきた。

あちこちが不気味に膨らんだ黒服で全身をすっぽりと覆った彼等は名乗ろうとはしなかつたし、それ以前に自分たちの姿をまともに視認させようとしなかつた。ウルやレイナと同じく二本の足で動いているかと思えば、時折武器を仕舞い込んで四つ足で大地を蹴って走り出す。

後ろから襲いかかられたイピチャはその巨軀で一氣に地を蹴って追っ手を一度引き離すと、口に啞えていたレイナを上へと放り上げた。レイナも慣れたもので、イピチャが反転して敵を迎え撃つたところで、その背に過たず着地する。

レイナはイピチャの背から辺りを見回し、状況を確認した。彼等だけならば、おそらくこのままこの場から逃げられる。しかしティグはそうもいかないし、レイナに彼を見捨てるといふ選択肢はない。

言葉も通じなかつた小さな頃に出会つて以来、彼は何度か、レイナを助けてくれた。それにウルは、決して群れの仲間を見捨てない。

レイナと姉弟のようにして育つてきたイピチャもまた、それを当然とした。

あの小鹿にとどめを刺した短剣で辛うじて相手の長剣をいなしているティグの元へ、イピチャは巨大な顎を開いて敵を蹴散らしながら突っ込んだ。どうも相手はこれほど強大な相手がいるとは思つてもみなかつたらしく、黒装束の上からでも分かるほど動揺しながら、猛突進するイピチャの進路から散り散りに逃げていく。

「十……ううん、十五人はいる。射手を入れたら二十人以上……」

口の中で呟いたレイナに、イピチャは獰猛な咆哮で応えた。

その声はエトウラに襲いかかった時よりも遥かに大きく、四方へ響いてあらゆる動物たちを本能的に怯えさせ、襲撃者たちをも凍り付かせた。

先祖返りのウル——そう呼ばれてはいるが、ウルたちの中にごく稀に生まれるイピチャのような巨躯の先祖が実際ウルにいたのかは、どうも怪しいとされている。むしろ彼等は、生き延びる為に強い身体よりも智恵を選んだ今のウルたちと道を分かち、智恵と強さを兼ね備えた別の方向への進化を志向する、新たな種としての突然変異なのではないかと言う語り部すらいる。

その狼の森の王者は何者にも邪魔を許さずに真つ直ぐにティグの元へ辿り着くと、揉み合っていた相手に躊躇いなく喰らいついた。血飛沫と悲鳴と共に敵の身体を跳ね飛ばし、

少し離れた木の幹へと叩きつけたその圧倒的な力に、襲撃者たちがまた動きを止める。

「殺しちゃ駄目だよ。このまま逃げよう」

レイナの声にイピチャは少し不服そうに唸ったが、その割には躊躇わずに指示に従った。背に乘ろうと手を上げたティグの前で顎を開き、容赦なく丸ごと口に啜えると、うひゃあと悲鳴を上げたティグには構わず、その場を走り抜ける。

揺れる背の上で、レイナは少しの間考えた。思い出したように後ろから射かけられる矢は、イピチャが巧みに進路を変えるせいで木々に阻まれて全く当たらない。

それでも時折耳元で唸る矢が気に罹って、レイナはイピチャの背に乗ったまま身を捻って振り向き、背負っていた弓を手にとった。

速度で勝るこちらを追って矢を放つ以上、敵は真後ろに姿を現さざるを得ない。過たずずんぐりした黒ずくめの姿を二つ見出したレイナは、相手の足を目かけて一本ずつ、続けざまに矢を射た。

ぐつと小さな呻きと共に、走っていた相手が両方転ぶ。

レイナは力こそないが、目はウル以上に良く、小柄さと器用さを生かした射手の才がある——と、よく育ての父に評されていた。大規模な狩りの時には中々生かしがたい唯一の才能だったが、こんな時に役立つとは皮肉な話だ。

とにかくも、これで落ち着いて考え事が出来ると、レイナは前に向き直った。イピチャの口からだらりと垂れて揺られているティグの手が助けを求めているような気もしたが、とりあえず気にしないでおく。いくら射手を足止めしたとはいえ、こちらも止まってティグを背中に引つ張り上げるほど油断は出来なかつた。

「引き離してはいると思うけど……このまま帰ったら、つけられるかも」

どうにか落ち着こうと呟きながら、レイナは必死に頭を巡らせた。そもそも、狙われているのは明らかに彼女だ。この場でつけられなかったとしても、彼女が見つからなければ襲撃者たちは遠からずケムの群れの仲間達に鉢合わせ、おそらくは良くないことが起きるだろう。

だが、それなら——それなら、どうすればいいというのだ？

大人しく殺される、という選択肢を論外とするのなら、誰か一人相手を捕まえて、何故彼女を狙うのか聞き出すか。しかしこんなにも殺気立った集団相手に、何の備えもない三人でそんな立ち回りが出来るだろうか。獲物を生け捕りにするのは、殺すよりも遥かに難しい。

考えている内に、レイナは何か妙な気配に気付いた。

森が騒いでいる。小鳥たちが悲鳴のように鳴き交わし、イピチャの足元をパツポスより

も小さな言葉なき小鼠たちが走つて行く。

これは、まるで――。

「な……」

背筋を駆け上つた嫌な予感に振り向いたレイナは、目を見開いた。

金の瞳に、揺らめく炎が映る。

木々が、ぱちぱちと火花を散らし、白い煙を上げながら燃えていた。

まだ水分を残した健康な木はどうにか炎に耐えていたが、地に落ちた葉や小枝に事欠かない森で、放たれた炎は地を這うように広がり始めるところだった。

ヒュンと空を切る音がして、レイナの顔を掠めた矢が隣の木に突き刺さり、そこで炎を上げる。

イピチャは怯むことなく走り抜けたが、その喉の奥からはレイナと同じ感情を証す、怒りの唸りが漏れていた。

彼の気持ち、レイナは代わりに言葉にした。

「火矢なんて、馬鹿なことを……！」

《狼の巣》、特にウルたちの住まう大陸ウルスターンは、今でこそ深い森に覆われているが、百年と少し前には、危うく砂漠になりかけた過去がある。

急激な技術の発展の代償にこの星の木々を枯らし尽くし、多くの動植物を絶滅へ追い込んだウルたちは、その贖罪として植えた木々やそこに住む獣たちを大事に守り、完全ではないにせよ、どうにかかつての姿を取り戻しかけるまでに育ててきた。

子供の頃から徹底的に森を守ることの重要さを説かれ、定めた縄張りの中で必要最低限の資源のみを採取する暮らしを是としてきたウルたちの間で育ったレイナもまた、この森を愛し大切にしてきた。

その森を焼くことは、レイナの育った（地のウル）の文化にとつてはいわば最大の禁忌の一つだった。盗みや群れの長に無闇に逆らうことは勿論、ウル同士の殺し合いよりもなお重い罪——それを、余所者が行おうとしている。

レイナとイピチャが怒りに震える間にも、火矢は一本、また一本と飛来し、行く手の木々を燃やしつつあった。巨躯に似合わぬ敏捷さを誇るイピチャにとつて素早く進路を変えて逃げ続けるのは造作もないことだったが、彼等が逃げれば逃げるほど、火が付く範囲は広がることになる。

ざり、と、レイナの奥歯が鳴った。

「あたしたちを追い込むために、ここまでするの……？」と。

不意に右手、思わぬ方向から矢が飛んできて、イピチャが弾けるように飛び退った。

瞋ったレイナの目に、灌木の影から立ち上がり次の矢をつがえようとしている人影と、その背後で同じように矢を準備している影が映った。しかし彼等の姿は、先刻の黒ずくめたちとは異なる。風貌を隠しているのは同じだったが、まだらに濃さを変えた深緑の頭巾は、どうも先の黒ずくめとは違う意匠のように見えた。

そちらに気を取られているうちに、イピチャが再び走り始めながら、ぐるぐると唸り声を上げて警告した。相棒の言葉なき声に慣れたレイナが慌てて身を伏せると、今度は左手から飛来した長剣が、彼女の頭の上を掠めて木に突き刺さった。

姿を現した第三の襲撃者はまだ遠くにいたが、長身に砂色の頭巾を被っていた。その周囲には、同じ格好の仲間が数人――。

詳細を見極める暇もなく、イピチャが速度を上げた。木々の隙間を縫いながら逃げる彼の行く手から、しかし次々とまた別の襲撃者たちが現れる。どうやら最初の襲撃者たちが放った火が目印となってしまうたらしく、謎めき殺気立った覆面たちは、真っ直ぐに彼女たちの元へ集っているようだった。

「訪ねてくるならせめて一組ずつにしてよ！ いったいなんだっていうの……！」
頭を抱えたい思いで呟いてから、レイナは身を伏せたおかげですぐ傍にあるイピチャの

大きな三角耳へ囁いた。

「どうにか振り切つて、隠れられそうな遺跡に向かおう。覚えてる？ オトが落ちてきた日に、あれを見た遺跡」

イピチャは答えなかつた——口に荷物を咥えているせいで、言葉では答えようがなかつた——が、黙つてすぐに進路を変えた。

ここはケムの群れの縄張り、ティグとイピチャが生まれ育つた森だ。襲われて逃げ惑うが、多少めちやくちやに走ろうが、迷うことはない。

だが、その森が今、白煙と黒煙を上げて火に包まれていく。

日は既に高く昇り、立ち上る不吉な火と煙は、青い空へと広がりがつあつた。



かつてウルたちが究めた、島を浮かべ宙を渡るほどの高度な技術。星を食い尽くしそうになった過ちの果てにそれらの殆どを捨てて星を鎖すことを選んだ地のウルたちだが、星が鎖されてから百年を過ぎてなお、技術の残滓はそこかしこに残されていた。

ウルたちの大陸、ウルスターンの各地に点在する灰色の遺跡も、その一つである。

石とも金属ともつかぬ素材で出来た細長い長方形を積み重ねたような独特の外見のこの建造物は、背の高い森の木々を楽々と越えて頭を出すほど高さがあり、一つ一つ形状が違う。よって目印にはちようどいいのだが、元々何の為に存在しているのかを知る者は、〈鎖す者〉の中にもほとんどいない。

とにかくもひとつ助かるのは、その内部が複雑に入り組んでいて、かつ並大抵の衝撃では小揺るぎもしないほど、外壁が頑丈であることだ。

つまるところ、分かりにくい入り口を把握していれば、要塞として機能しうるのだ。

「そ、そろそろ下ろして……ぐえ」

どうにか追っ手を振り切り、遺跡の内部の階段を駆け上がったところでようやく立ち止まったイピチャの口に未だ啞えられたままのティグが呻くと、イピチャは思い出したように顎を開いて、ティグをぼりと床に落とした。

「あ、悪意がないのは分かっているけど、イピチャはレイナ以外の扱いがどうも雑なんだよなあ……」

呟きながら這々の体で立ち上がって身震いしたティグは、情けなく耳を半分伏せつつも、すぐに入り口を振り向いた。

「一体あいつら、何なんだ……？ まだ余裕でケムの群れの縄張りだったし、近くの群

れにしては殺気立ち過ぎてた気がするけど……つていうか、そういう数じゃなかった！」
レイナは彼の言葉に頷いて、眉をしかめた。口にしていいものかと少し躊躇ってから、小さな声で囁く。

「まさか……ヤシヤト？」

その問いに首を傾げたのは、イピチャだった。

「しらない、匂いは、した。妙だ」

並々ならぬ嗅覚の持ち主である彼にしては、それこそ妙に曖昧な言葉だった。レイナは相棒そっくりに小首を傾げてから、はたと頷く。

「そっか、イピチャだって、ヤシヤトには会ったことないんだもんね。分かんないか」

「それもあるだろうけど、それだけじゃない気がする。連中、色んな匂いがしたよ。あれこれ匂いをつけて正体を誤魔化そうとしてたんじゃないかな」

ティグが横から言うと、イピチャは我が意を得たりとばかりに小さく鼻先を下げ、頷いた。この辺りは、レイナの感覚ではよく分からない話だ。

「そういうこと……なんだかやな感じ。随分準備してみたんじゃない」

「こんなケムの縄張りのど真ん中でいきなり襲いかかってきたんだから、それなりに準備はしてただろうけど……その割に、イピチャのことは知らなかったみたいだね。それに

あいつら、最初にレイナを狙ってなかった？」

その指摘を受けて、レイナは思わず、拳で自らのこめかみを叩いた。そうだ。どうにも正面から考えたくなくて思考を逸らしていたが、その事実は否定しようがない。

「……やっぱりそうだよね、あれ。パッポスといい、今日はあたしにお客さんが多い日だなあ」

「そろそろ世界中に〈裁定者〉レイナの話が広まった頃だろうし、客が増えるの自体は仕方ないけど……今回のお客さんたちは、あんまり歓迎できない感じだね」

「パッポスも突然だったけど、まだ礼儀正しかったかも」

肩をすくめて苦笑してから、レイナは溜息をついて、壁伝いに遺跡の中を少し歩いた。

ウルスの遺跡の内部は大抵が暗がりだが、一番外側には薄く日の差し込む窓めいた隙間が残してある。そこから外を窺って、レイナは少し考えた。

青々と茂った木々が邪魔をして、遺跡の一番上から見え、森の全てを見渡すことは出来ない。しかし遺跡の周辺には、不思議と木が生えない草地がある。あの襲撃者たちが今どこにいるかを知ることが出来なくても、接近されれば分かるはずだった。

幸いレイナの姿を見失った後に無闇に火を射かけるようなことはしていないらしく、森のどこどころから上がっている煙は、それ以上広がる気配はない——今のところは。

わずかだが、猶予はある。しかし猶予を得て、何を考えればいいというのだ？

突然の小さな訪問者に、彼が告げたヤシヤトの使節団の話。その帰り道に次々に現れた、謎の襲撃者たち。

「……どう考えたって、あたしが《狼の巣》ウル・ターシヤを開いたこと……つていうか、〈裁定者〉になつたことと、関係あるよね」

呟くように言うと、ティグが少し気遣わしげに片耳を伏せながらも、頷いた。

「たぶんね。けど、リファロンからは何も……なにか、誰かに狙われるかもしれないなんて話、聞いてないんだろ？」

「聞いてたら、のんびり休んで狩りなんてしてるわけない」

答えた自分の声が棘を孕んで不服そうに響いたのに気付いて、レイナは窓の外を見つめたまま目を細め、小さく首を振った。

「ごめん」

少し八つ当たりをしたと、レイナは自覚していた。

平穩だったこの一ヶ月、彼女は心のどこかでずっと思ってきた。この日常はいつまで続くのかと。今にも終わるのではないのかと。もしか終わらなかつたとして——果たして自分は、このままここにいていいのかと。

もう随分と昔に思える一月前、彼女はいくつかの出会いと、短くも決定的な旅を経験した。その果てに、百年に亘って宇宙に対して鎖ウル・ターシヤされていたこの惑星《狼の巢》は再び開かれ、レイナはその決断を行った者、《裁定者》となった。

そして、それきり、何もしてこなかった。

残された問題は、本当は幾つもあったのだ。かつてのウルたちが大掛かりなシステムを作り上げてまで鎖した星を、それが彼等の決めたルールだったとはいえ、ぽつと出の、それも出自の記憶を持たない漂泊の異星人たるレイナが唐突に勝手に開いた、その結果起きた幾つものこと。

役目を終えた鎖星システムの今後や、これまで《鎖す者》たちだけに伝えられてきた古の超技術をどうやって周知していくのか、ケムの群れの縄張りの外れに隠された今はまだ動かない宇宙船の扱い、かつてその中から出て来たはずの者たちの搜索と処遇――。

星開きに立ち会った番人の童リファロンは言った、それらすべてをレイナが抱え込むことはない。逆に彼女には本来何の関係もないことがほとんどなのだから、あとはウルたちに任せてしまえばいいのだと。

実際レイナも思う、そんなにも大きな幾つもの問題を前に、彼女が考えたところで出来ることなどたかが知れている。それは、分かっている。だからこそ彼女は、すべてを群れ

の長へと報告した後で、ひとまず傷が癒えるまでと、日常の中での休息を選んだ。けれど。

そんな当初の思いとは裏腹に、レイナの中の違和感と焦りは、日に日に増すばかりだったのだ。

本当にこんなことをしていいのか。あれだけのことをしておいて、全てを放り出して知らん顔をしているのは、あまりにも無責任ではないのか。

けれどそう思ったところで、レイナに何が出来る？

牙も爪も持たない、ちっぽけで脆弱な異星人。ティグやイピチャに守られてばかりで、多少弓の腕が立ったところで、大鹿一頭も一撃では仕留められない。

それもそうだろう。そも彼女が、今この星にいること自体が――。

「レイナ？」

少し強く名を呼ばれて、レイナはびくりと肩を震わせ、はつと振り返った。

すぐ傍に、どこか気遣わしげな青い目をした、ティグ。

「大丈夫？ ごめん、おれの言い方も、少し無神経だった……今日は折角の狩りだったつてのに、獲物も落としてきちゃったな。手ぶらで帰ったらまたじいちゃんやヤルグにどやされるや。おまえはまだ鼠一匹狩れないのかって」

温かな焦げ茶色の毛並みをした心優しいウルの少年は、冗談めかしてそう言った。

レイナもくすりと笑い、肩をすくめてティグの腕を叩いた。

「パップスに頼んで、一緒に帰ってもらえばよかったかもね」

「その手があった」

牙を覗かせて笑ったティグに、レイナは笑いながら視線を外へと戻し、ひとつ深く呼吸した。

この一ヶ月動かなかったことを、後悔していても仕方ない。実際彼女は〈裁定者〉が狙われる理由になど全く心当たりがないし、方々へ星開きの報を告げて回っているリファロンドだつて、知っていれば発つ前に何か教えてくれたことだろう。

つまりこれは、完全に想定外の事態なのだ。彼女にとつても、誰にとつても。

ならば抱えていた焦りを無闇に現状に結びつけて、一人で苛立っている場合ではない。今はこれからどうすべきかを考えるべきだ。

ここにはティグがいて、イピチャがいる。二人をこれ以上巻き込みたくなくても、こうなった以上彼等が彼女から離れないことは明白だ。それならば、どうにか彼等の手を借りて、あの襲撃者たちを退ける他なかった。

そう決意した、矢先。

ふと視界の隅で何か光った気がして、レイナは素早く金の瞳を巡らせた。

木々の切れ目、遺跡と遺跡を繋ぐ細い道を、一団の影たちが横切ったところだった。

一瞬しか見えなかったが、木々の影から影へ、妙にこそそと移動する彼等は、暗緑色の奇妙な外套を頭からすっぽりと被っていた……のでは、ないか。

胸騒ぎに彼等から視線を外して見える限りの森を見渡したところで、レイナは他の場所でも、ちらと煌めく白刃や鎌、見慣れぬ服装に身を隠した影を、見た気がした。

不安から来る幻覚ではないかと数度瞬きしてから、再度細い窓に顔を突っ込むようにして見定める。

しかし——幻ではない。必ずしもこちらへ向かっているわけではなかったが、何かを探すようにあちこちを見渡しながら、突然の訪問者たちはケムの縄張りを歩いている。

普通の地のウル、技術を捨てたウルたちは、かつての超技術の遺産たる遺跡へ無闇に立ち入ることに、多少の心理的抵抗がある。故にそう気軽には近付かない場所なのだが、そういうえばあの襲撃者たちはウルとは限らないのだった。

「……隠れる場所、間違ったかな」

今更そう思い当たって、レイナは冷や汗を掻いた。遺跡には数箇所の出口があるが、万一彼等が連携を取るような間柄で、周りを囲まれてしまったなら、終わりだ。かといって、

この辺りには身を隠せそうな洞窟の一つもなかったから、仕方ないのだが――。

と、その時、イピチャとティグの耳がぴくりと動いた。

数拍遅れて、レイナもその音に気付く。

羽ばたき――鳥の羽ばたき、それもかなり大きな、巨大な翼が風を打つ雄大な音。

レイナははっと灰色がかつた天井を見上げてから、確かめるようにイピチャとティグを振り向いた。

「この匂いは――彼女だ、間違いない」

外からの風に鼻を向けてからぱっと顔を輝かせたティグに、レイナははっと息をつきかけてから、努めて気を引き締めた。

結果論ではあるが、どうやらここに逃げ込んだのは、そうひどい間違いでもなかったようだ。光明は見えた――だが、おそらくその光は、新たな問題を照らし出すに違いない。

そう考えながら、レイナは二人に合図をして、遺跡の内部を駆け上がった。〈鎖す者〉であるティグは縄張りの遺跡の内部を熟知しているし、彼と幼馴染みである上にウルスの禁忌の感覚が薄いレイナも、この遺跡の中がどうなっているかは知っている。

少し息を切らしながら数階の階段を休まずに登り切れば、そこには遺跡の最上部に設けられた、小さな屋上の展望台があり……今まさにそこに舞い降りた、イピチャをさらに上

回る巨軀と三対の翼を備えた威容を誇る、漆黒の竜が待っていた。

彼女こそは、星守りの竜リファロン。

一ヶ月前、レイナを〈裁定者〉にした張本人にして、星が鎖された日からの百年この星のすべてを見守ってきた、古き空の主。

そしておそらくは、この不可思議な状況に対する答えと対策を持っている可能性が最も高い、この日一番待たれていた訪問者に他ならなかった。

★ 本文サンプルはここまでとなります。続きは書籍にてお楽しみ下さい。

《狼の巢》

黎明れいめいの銀獅子ぎんじし

サンプル

発行日

二〇一五年八月七日

初版発行

発行者

狐灯籠きつねとうろう／後月あじつこたつ

kotatsu@quels.net — <http://fox.quels.net/>

※本書の無断転載・転売・ネットオークション出品を禁止します。